

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：17104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K01037

研究課題名(和文) 南部アフリカ西欧系社会集団の移動史料研究：19世紀前半接触領域の異文化間交流

研究課題名(英文) European passengers to South Africa and the historical sources: Cross cultural communication within the contact zone during the early 19th century

研究代表者

水井 万里子 (Mariko, Mizui)

九州工業大学・教養教育院・教授

研究者番号：90336090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本課題の実績として、2018年度、2019年度に移動と史料に関する研究会を実施し、個別の資料収集・分析状況を報告、あわせて2021年度に出版した共著の図書の編集打合せを行った。また、史料収集のための調査については、研究代表者水井はイギリス東インド会社の資料収集をロンドンのBritish Libraryで実施、辻本が同じくロンドンで軍事史関連の史料を収集した。採択2年度目に予定していた南アフリカの史料調査、イギリス、オランダでの調査については、感染症の世界的な蔓延状況から実施を見合わせる事となった。このため、オンライン収集史料、手持ち史料、刊行史料を加えた研究成果を2021年度に出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

下記の成果論文集を2021年度に出版し、移動史料の特徴を学術的かつ広く一般に理解されるよう努めた。水井万里子、大澤広晃他編著『史料が語る東インド航路 移動がうみだす接触領域』勉誠出版、2021年。うち、水井万里子「18世紀末から19世紀初頭のセント・ヘレナ島における移動と接触」は東インド会社史料の接触領域分析における有効性を検証した。また大澤広晃によるメソヂスト宣教師の史料の特徴に関して、辻本論の英領ケープ植民地における陸軍と関連史料 1775～1820年、和田郁子のオランダ東インド会社のケープ居留地建設についての論考が本研究課題の根幹に関わる成果としてあげられる。

研究成果の概要(英文)：The research meetings, concerning immigration and settlement through the passage to South Africa, were held in 2018 and in 2019. Each member of the project had reported the sources and its analysis about their theme. In addition, the members planned to edit the book collected papers related. Further, Mizui had been to London for researching at British Library, while Tsujimoto had been there for collecting the sources about British Military History in the first year.

The members would have stayed at Cape Town for researching at several archives during the second year, along with UK and Holland, yet the global affairs of preventing Covid 19 made it difficult. The members decided to extend the research period into the fourth year, however, it could never be fine to research abroad until the end of the fourth year. In July 2021, a book East India Passages and Historical sources, the members used the sources collected from online databases, with the printed sources.

研究分野：西洋史

キーワード：移動 史料 東インド会社 メソヂスト教団 イギリス軍事史 南部アフリカ

### 1. 研究開始当初の背景

19 世紀南部アフリカへのヨーロッパ系の人々の移動の研究は近年注目される分野であり、オックスフォード・イギリス帝国史シリーズの *Migration and Empire*, (eds.) M. Harper and S. Constantine, Oxford, (2010) において一章が同地域への移民研究成果の概観にあてられている。また、本研究課題が史料研究の視点として取り入れる「接触領域 = コンタクトゾーン」の概念は、メアリ・ルイーズ・プラットが著書 *Imperial Eyes*, Routledge (1992) で主張した。18 世紀から 20 世紀にアフリカと南米を訪れたヨーロッパ人が記した叙述群には、作者が現地で異文化の人々と接触することにより、ヨーロッパ文化と現地文化の相互影響が見られた。また、叙述自体に異文化間の循環の諸相があらわれ、これが同時代のヨーロッパの読者の「他所の世界 (the rest of the world)」に対する視座の形成に影響し、新しい世界観を誕生させるとともに文化的な変容を促した。プラットはこのような空間を接触領域と定義し、ここを帝国期の異文化が不均衡なバランスで混ざりあう場であったとする。この接触領域の議論を、ヨーロッパ系の移動する社会集団の史料を用いてどこまで深めることができるかが本研究を開始した時点の主たる課題となった。

### 2. 研究の目的

本研究課題では文化人類学、文化社会学で既に広く援用されている上記の接触領域の概念を歴史学における史料研究の方法に位置することを試みる。具体的には、19 世紀前半を主たる対象時期とし、南部アフリカ地域に移動したヨーロッパ系の社会集団が生み出した記録、報告書、書簡といった史料群が、接触領域における異文化接触によってどのような影響を受け、その視点が同時代の読者の世界観を形成したのかを詳細に検討することで、人々の移動にともなう異文化の混淆を史料から検討し、実証的な研究基盤を構築する。

本研究課題の目的は、ヨーロッパ系社会集団が移動し異文化と出会った 19 世紀前半の南部アフリカを設定し、彼らがこの空間で作成した史料群を「移動史料」として同時代的な文脈に置き、相互に連関させながら位置付け、統合することで、多様な文化の相互影響・循環の諸相が明らかにし、接触領域における「見えにくい人々」を歴史的に可視化することにある。

19 世紀前半の南部アフリカにおいては、オランダ、イギリス系のヨーロッパ人と現地に集う多様な人々との異文化接触の機会が増大した時期であった。後に南部アフリカが帝国支配の時代へと向かう過渡期にあたるこの時代は、宣教師、英蘭東インド会社商人、駐留軍人などヨーロッパから移動した人々が、それぞれの社会集団ごとに役割をもって、現地の文化・社会に関して叙述した文書を作成した。当時の史料に描かれた歴史的な諸事や、個人的・集団的な経験は、現地の人々とその文化、それらに対するヨーロッパ系の人々の価値観、相互影響など、時代を下った帝国期に比べても未だ分析の余地が多く残されている。このため、当該時期のケープタウンを中心としつつ、上記の社会集団の生み出した史料群を収集・分析し、見えにくい人々の可視化の方法を提示することとする。

### 3. 研究の方法

19 世紀前半の南部アフリカに関するヨーロッパ系史料の残存状況、分散による研究上の困難ゆえに、歴史の表面から「見えにくい (invisible)」人々や物事を見出そうとする歴史学研究は、複数の史料の連関や統合という史料研究方法の課題と問題を共有している。

上記の問題関心・研究目的をふまえ、本研究課題では、当該時期に南部アフリカに渡った 3 つのヨーロッパ系社会集団 オランダ・イギリスの東インド会社商人 イギリスのメソジスト宣教師 イギリスの駐留陸軍軍人について、以下の史料群をまず検証した。

英蘭東インド会社史料・植民地史料 (イギリスは水井、オランダは和田が史料収集・分析を担当): 18 世紀末から 19 世紀にかけてイギリスとオランダの支配がめまぐるしく交錯するケープ植民地に焦点をあて、オランダ国立文書館 (VOC/1.04.02, 3988-4360 等)、ライデン大学図書館に所蔵される植民地史料を収集・分析、当時のケープ植民地の都市社会における多文化接触のあり方をオンラインで抽出した。19 世紀以降、イギリス東インド会社の南部アフリカ関連の商業活動が顕著になり、ケープ近海セント・ヘレナ島の同社商館と 1830 年代までケープに駐在した同社の代理人間の書簡 (英国図書館所蔵: IOR/G/32 等) が主な検討対象となり、同図書館所蔵の同社ロンドン HQ の議事録・通信文書を通じ、代理人と同社が請負ったイギリス政府募集移民団「1820 年入植者」の現地支援業宇と異文化接触のあり方も分析した。

イギリスの駐留軍人とその家族の史料群 (辻本が史料収集と分析を担当): 18 世紀末にケープ武力奪取後、イギリスは陸軍だけで 5000 人余を同地に駐留させ、ナポレオン戦争後 1000 人以上が現地に駐留した。1830 年代半ば以降開拓地の拡大とともに東部などで紛争が激化し再び兵力の必要性が増し、現地部隊が組織されることになり、駐留地ケープからやがて周辺地域に駐留軍が展開し接触の場が広がった。南部アフリカに駐屯したイギリス陸軍軍人 (将校) の手紙

や日記、軍人の妻の日記の刊行史料群（国立陸軍博物館：M. Carver(ed.), Letters of a Victorian Army Officer: Edward Wellesley 1840-1854, Stroud, 1995 等）からは駐留軍と家族が現地文化・社会と接触する様子が広く明らかにされた。

イギリス人宣教師史料群（大澤が史料収集と分析を担当）：19 世紀初頭に南アフリカに進出したメソディスト宣教団は、ケープ植民地東部境界地帯で勢力を拡大した。同宣教団は、非キリスト教徒であるアフリカ人だけでなく、同地に入植したイギリス系白人をも対象に活動していた。メソディスト宣教団の文書史料は、白人宣教師とアフリカ人の係わりのみならず、白人入植者とアフリカ人の関係をも明らかにしている。

#### 4. 研究成果

(1) 水井万里子、大澤広晃、杉浦未樹、吉田信、伏見岳志編著『史料が語る東インド航路移動がうみだす接触領域』勉誠出版、2021 年。論文集である同書に掲載された応募者全員の単著論文は以下の通りである。

- ・水井万里子、伏見岳志、大澤広晃「序（1）史料と接触領域（2）東インド航路の多様性と可能性（3）近現代の帝国と東インド航路」pp.4-11。
- ・水井万里子「18 世紀末から 19 世紀初頭のセント・ヘレナ島における移動と接触 イギリス東インド会社関連史料から」pp.99-110。
- ・大澤広晃「18～19 世紀前半の南部アフリカにおけるイギリス系プロテスタント宣教団 移動史研究の前提として」pp.141-152。
- ・大澤広晃「19 世紀前半の南部アフリカにおけるウェスリアン・メソディスト宣教団 史料の特徴とそのナラティブ」pp.153-166。
- ・辻本諭「英領ケープ植民地における陸軍と関連史料 1775～1820 年」pp.123-140。
- ・和田郁子「ケープ・ルートの多様化とオランダ東インド会社のケープ居留地建設」pp.21-34。
- ・伏見岳志「東インド航路のなかのアフリカ」pp.12-20。
- ・伏見岳志「植民地をつなぎなおす スペインとポルトガルの帝国再編」pp.46-57。

#### (2) 東インド航路上の移動の特質

上述の図書では、18 世紀から 19 世紀前半に東インド航路を移動したヨーロッパ系の社会集団が残した史料群を「移動史料」と定義し、その分析から、航路上の移動と接触によって現れる各地の「接触領域」における多文化の混淆のあり方を、南部アフリカのケープに中心を置きつつ人々の移動拠点まで視野を拡大して明らかにしている。深い移動史料分析のために、グローバルな歴史背景、航路・植民都市・入植地の展開を検証し、実証的研究基盤を確立することに各論文の目的が置かれた。史料群 英蘭東インド会社商館文書等の商業史料 南部アフリカのイギリス駐留軍人関連文書 南アフリカのキリスト教宣教団関連文書に描かれた接触領域における多様な人々の交流の諸相を詳細に抽出した。特に、東インド航路を移動し入植地で奴隷として働く人々のあり方、南部アフリカに駐留する兵士、現地エージェント、ローカルな人々と移動者たちの関係性の一端が明らかとなり今後さらに探求すべき課題が発見された。

#### (3) 大西洋航路と東インド航路の接続

西欧系社会集団、統治者、入植者、ローカルな人々の関係性について、研究会で比較検討した結果、南米のスペイン語圏の商業史料から 大西洋航路、接触領域論の研究に詳しい連携研究者伏見岳志（慶応義塾大学商学部）の研究成果が得られ、接触領域の移動史料研究の知見を拡大するとともに、上記の成果論集の中で重要な論点が提供された。南部アフリカは東インド航路上にあり、アジアと西洋を行き来するヨーロッパ系の人々にとって航路上の休憩地となっていた。伏見の論考からは、南部アフリカが大西洋航路の往来にとってもヨーロッパ人にとって重要な地域づけであったことに加え、東インド航路と大西洋航路を結ぶ結節点として機能していたことが示された。また、和田の論考からはオランダ東インド会社が建設したケープの居留地へつながるルートがインド洋を中心に多様化していたことが明らかとなった。これらの論考では、当該地域に先行して進出したポルトガル、およびスペインに関わる事例に触れ、ヨーロッパ系の人々の移動をより詳細かつ拡大して検討することが本研究課題の目的に沿うものとして重視された。

#### (4) 交通・通信の発達と東インド航路の変容

スエズ運河の開通は、東インド航路にも大きな影響を与えた。19 世紀後半の蒸気船の運行とあわせれば、アジアとヨーロッパをつなぎ、グローバルな移動の中心ともなった東インド航路上の南部アフリカは、長距離航路の短縮によってその性質が転換していったことがうかがえる。移動する社会集団も入植者などより大規模かつ多様になり、移動史料の在り方もこれに大きな影響を受けることが上記の図書で示され、19 世紀後半以降の豊富な研究成果と接続するような研究視点の必要性が明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 辻本諭	4. 巻 56巻2号
2. 論文標題 一九世紀初頭におけるイギリス陸軍軍人の軍隊経験とキャリア形成 特進将校ジョン・シップ（一七八五～一八三四年）に注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 49 - 68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻本諭、田中伸、三浦寛之	4. 巻 69巻2号
2. 論文標題 教師・歴史学者・社会教育学者が協働した授業のゲートキーピング（2） P4Cを用いた歴史教育実践：移民を考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）	6. 最初と最後の頁 23 - 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Tsujimoto	4. 巻 22
2. 論文標題 Military history from a wider perspective: recent scholarship on the British army and society in the long eighteenth century	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 63-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田澤晴子、辻本諭	4. 巻 68(2)
2. 論文標題 満蒙開拓団の体験を学校教育でどう教えるか 日本近代海外移民史の学習を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真下 裕之 監修 二宮 文子、真下 裕之、和田 郁子 (訳注)	4. 巻 47
2. 論文標題 アフル・ファスル著『アーイーニ・アクバリー』訳注(8)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『紀要』(神戸大学文学部)	6. 最初と最後の頁 81-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻本論	4. 巻 127 (12)
2. 論文標題 結びつきの場としての軍隊—八世紀イギリス陸軍将校の人的つながりに注目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 39-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻本論	4. 巻 67 (2)
2. 論文標題 軍隊と一般の人々をどうつなぐか 英国国立陸軍博物館 (NAM)の新たな試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学)	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真下裕之監修、二宮文子、真下裕之、和田郁子 (訳注)	4. 巻 46
2. 論文標題 アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (7)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 紀要 (神戸大学文学部)	6. 最初と最後の頁 27-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水井万里子	4. 巻 970
2. 論文標題 書評：川分圭子『ボディントン家とイギリス近代』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 41-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 水井万里子
2. 発表標題 19世紀初頭イギリス東インド会社関連資料から見る移動と接触の諸相 - セント・ヘレナ島を中心に -
3. 学会等名 国際商業史研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和田郁子
2. 発表標題 近世コロマンデル海岸の港町 海上交易と内陸社会
3. 学会等名 洛北史学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ikuko WADA
2. 発表標題 Ray skins and Japanese swords: reception of imported material before the emergence of a symbol of national aesthetics
3. 学会等名 Cultural Mobilization: Cultural Consciousness-raising and National Movements in Europe and the World (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ikuko WADA
2. 発表標題 Tropical ray skins for the swords in early modern Japan
3. 学会等名 COGLOSS seminar (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和田郁子
2. 発表標題 近世南アジアの欧文史料と旅のテキスト
3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「近世南アジアの文化と社会：文学・宗教テキストの通言語的比較分析」2018年度第2回研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 水井万里子他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 410
3. 書名 ものがつなく世界史	

1. 著者名 大澤広晃	4. 発行年 2019年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 97
3. 書名 帝国主義を歴史する	

1. 著者名 大澤広晃（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 人々がつなく世界史（永原陽子編著）	

1. 著者名 大澤広晃・高岡祐介（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 行路社	5. 総ページ数 196
3. 書名 近現代世界における文明化の作用「交域」の視座から考える	

1. 著者名 君塚直隆、辻本諭他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 184
3. 書名 よくわかるイギリス近現代史	

1. 著者名 水井万里子、大澤広晃、杉浦未樹、吉田信、伏見岳志（共編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 史料が語る東インド航路ー移動がうみだす接触領域ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	辻本 諭 (TSUJIMOTO Satoshi)  (50706934)	岐阜大学・教育学部・准教授  (13701)	
研究分担者	和田 郁子 (WADA Ikuko)  (80600717)	岡山大学・社会文化科学研究科・准教授  (15301)	
研究分担者	大澤 広晃 (Osawa Hiroaki)  (90598781)	法政大学・文学部・准教授  (32675)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	伏見 岳志 (FUSHIMI Takeshi)  (70376581)	慶応義塾大学・商学部・教授  (32612)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
南アフリカ	ステレンボシュ大学			